

子どもの本だな 47

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

やまのたけちゃん

石井 桃子 作
深沢 紅子 絵 (岩波書店)

秋がきました。たけちゃんが目をさますと、兄ちゃんたちが牛車で落ち葉かきに出かける用意をしています。「小さい子どもと犬はダメ」とおばあさん。でもたけちゃんはどうしても行くと言い張ってついていきました。山に着くと落ち葉をかいて入れ、大きな籠はたちまちいっぱいになりました。兄ちゃんが籠の上でピョンピョン跳ねると落ち葉はズンズン沈みます。こうして籠は落ち葉でぎっちりいっぱいになりました。兄ちゃんたちがいない間にたけちゃんは籠の上に這い上がりドン！と跳ねました。その途端、籠とたけちゃんはゴロリン！と山を駆け下りはじめました。

山の暮らしの中でのびのびと生活する子どもたちがやわらかい色の水彩画で描かれ、なんでもやってみようとするたけちゃんの活躍は大きな満足を与えます。読んでもらえば 4 歳から楽しめます。(西村)

ロビン・フッドのゆかいな冒険

ハワード・パイル 作・絵
村山 知義・村山 亜土 訳 (岩波書店)

シャーウッドの森の奥深くに、ロビン・フッドと言う名高いおたずね者と仲間たちが住んでいました。弓の名手ロビンは 18 歳の時、森役人達の言葉に腹を立て、怒りのあまり王様の鹿と役人を射殺してしまいました。森に隠れ住むようになったロビンの元に、同じ様なおたずね者たちが集まり、自由気ままに暮らしました。そこに、小人のジョーンやタック坊主など、腕の立つ豪傑が次々と集まり仲間になりました。緑の服を着、強欲な貴族や僧侶をこらしめ貧乏な人々を助けてくれる彼らを、村人たちは「楽しき人々」と呼び、敬いました。

イギリスの伝説の英雄ロビン・フッドの物語。弓の名手ロビンと個性豊かな豪傑たちが繰り広げる弓や棒の戦いは、豪快で迫力があります。著者の描いた挿絵は、中世の雰囲気がよく表れ、ロビン・フッドの世界をより深く味わえます。10 歳くらいから。(池之上)

9月	10月	9・10月の移動図書館 (いずれも木曜日です)					<h3>お知らせ</h3> <p>毎週土曜日に 「おはなしの時間」 を開いています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4歳～2年生 11:00～ ・3年生～中3 11:30～ <p>9月のおはなしは、 「ラプンツェル」「リヌスとシグニ」「ねこ先生ととらのお弟子」 などを予定しています。 詳しくはプログラムをご覧ください。</p>
7日	12日	塚森 地域内 10:30～10:50	沖代 地域内 11:00～11:20	福地(三反長) 地域内 14:30～14:50	米田 公会堂 15:00～15:20	竹広南 公民館 15:30～15:50	
14日	19日			原池団地 公民館 15:00～15:20	山田 掲示板前 15:30～15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00～16:30	
21日	26日	広坂 公民館 10:30～10:50	上太田 公民館 11:00～11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30～15:50	吉福 公民館 16:00～16:30	

『 脱出記 シベリアからインドまで歩いた男たち 』

スラヴォミール・ラウイツ 著

海津 正彦 訳 ソニー・マガジズ 383頁 2005年9月刊 2,200円 (請求記号) 329.6

1941年4月、7人の男たちがシベリアの収容所を脱走した。本書は、彼らが6500kmもの道のりを踏破し、インドにたどりつくまでの回想記。

25歳のポーランド人、ラウイツは、スパイ容疑でソ連に逮捕され、真冬のシベリアに送られた。刑期は、それまでの人生と同じ25年。ラウイツは、自由を手に入れるため、6人の仲間を募り、脱走を決行。持ち物は、乾燥させたパンと、ソ連兵の目を盗み作った毛皮の衣類、斧、ナイフ、火熾しの道具のみ。常に空腹のため、運よく野生動物を手に入れても、胃が受け付けず腹痛を起す。残った皮は、靴にした。人目を避け極寒のシベリアを南下していく道中、集団農場から逃げ出した少女が加わった。モンゴルに入り、出会う人々から温かいもてなしを受けるも束の間、一行は魚の干物だけを携えゴビ砂漠へ足を踏み入れた。暑さに体の水分は奪われ、焼けた砂で足には水ぶくれができた。食糧は5日で尽き、数日後にオアシスに行き着けたものの、水を運ぶ容器もなく、先にはなにかがあるはずという希望のみで前進するしかなかった。砂漠の暑さは、2人の仲間を奪った。一行は砂漠の蛇を食べ、命をつないだ。砂漠を抜けると、チベット、ヒマラヤ越えが続く。チベットの村人の反対を押し切り、6人は冬のヒマラヤへ向かった。

さらに2人の仲間を失いながら、ヒマラヤの山々を越え、インド駐留のイギリス軍に助けられる。仲間の存在に助けられ、極限状況を前に進む人間の強さに驚きを感じる。過酷な道のりのなか、持てるものを惜しみなく差し出し、もてなしてくるモンゴルやチベットの人々との出会いに、読む者の心も温かくなる。

(竹内)

9月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	×	6	7	8	9
10	11	×	13	14	15	16
17	18	×	×	21	22	23
24	×	×	27	28	29	30

10月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
1	2	×	4	5	6	7
8	9	×	×	12	13	14
15	16	×	18	19	20	21
22	23	×	25	26	27	28
29	30	×				

*カレンダーの×印は休館日です。

*■は館内整理日。返却のみ受けつけます。(10時~17時)

*開館時間は、10時から18時まで。金曜日は、20時まで開館です。

地下水

昨年9月、糸井の鍛冶田遺跡の現地説明会に行った。堅穴住居跡や水田の跡を見学し、出土した土器片を見せてもらった。自然光でみる土器のかげらの鮮やかな色、模様の繊細さに驚いた。土器に使用されている土を調べると、当時の人々の移動範囲もわかるという。

先月26日、あすかホール、ミニシアターを会場に「やさしい考古学講座」を開催した。兵庫県立考古博物館学芸員の深井明比古さんが「縄文の人々のくらしくひょうごの発掘成果から読み解く」と題して、自身が発掘された、町民体育館近くの「東南遺跡」と淡路市の「佃遺跡」を対比させながらお話し下さった。小学4年生から大人まで40名余りの参加者に、豊富な資料を使って丁寧な説明し、質問に答えられた。

当時の人々は、水害を避け少し高くなった土地に楕円形の集落をつくり、ドングリなどの木の実やシカ、イノシシを食べていたという。イチイガシはあくぬきせずに食べられると聞いた5年生は「今の自分たちも食べられるか」と質問していた。講演の最後、教育委員会員の文化財で用意してもらった土偶や土器を手に取りながらの説明に、参加者は再び驚いたり感心したり。縄文後期のものという土偶は、掌にのるほどの大きさで、女性の上半身をかたどっているらしい。顔がなく一見性別不明だが、お腹の真ん中に引かれた線(妊娠線)で女性とわかるのだそうだ。展示した本を借りて行かれた方や、翌日「いい会やった」と言ってくださった方があり、暑かった8月を終えた。

(片木)

